

都市振興と祭り： 北九州市の「わっしょい百万夏まつり」を事例に★

アジア成長研究所上級研究員 田村一軌

アジア成長研究所上級研究員 韓 成一

アジア成長研究所研究部長 戴 二彪

要 旨

日本で毎年様々な祭りが国内各地で開催されている。日本の祭りは、従来は宗教色の強い伝統行事というイメージが強かったが、1980年代以降、都市コミュニティの連帯感を増強するために、多くの市民の参加を引き付ける娯楽性を重視する祭りが増えた。近年では、少子高齢化が進むなかで地方圏都市の商業・飲食サービス業の低迷状況が続いており、観光や商業振興の起爆剤として祭りの経済的な役割にも期待が集まっている。地方自治体は地域活性化における祭りの役割を重視しつつあるが、自治体の財政事情が厳しくなるなかで、祭り運営に対する積極的な関与が財政状況の悪化に繋がるリスクがあるとも懸念されている。

本研究は、北九州市における祭りの歴史と近年の開催動向、祭り運営の取り組みを紹介したうえで、同市の都市振興戦略における祭り開催の位置づけとその実際の効果を考察する。また、北九州ならびに類似の地方都市における祭り運営のあり方について若干の提言を行う。

1. はじめに：都市と地域の発展における祭りの重要性

世界有数の祭り大国である日本においては、国内各地で毎年様々な祭りが開催されている。日本の祭りは、従来は宗教色の強いイベント（伝統行事）であるというイメージが強かったが、1980年代以降は、都市コミュニティの連帯感を増強するために多くの市民の参加を引き付ける娯楽性を重視する祭りが増えた。さらに近年では、少子高齢化が進むなかで地方圏都市の商業・飲食サービス業の低迷状況が続いており、観光や商業振興の起爆剤として祭りの「経済的」な役割も大きな期待を集めている。

祭りの機能の多様化およびそれに対する注目の増大に伴って、祭りへの考察・研究は、従来の文化人類学・歴史学・民俗学から文化経済学・都市・地域経済学などへ拡大している。京都大学名誉教授の山田浩之らは、日本の祭りを神事（宗教的行事：する祭）と祭礼（祝祭行事：見られる祭）に分類し、祭礼が観光事業化すると、見られる祭が見せる祭に変化すると分析している。このような変化に伴って、祭りという伝統文化の社会経済的側面、いわゆる文化資本としての重要性が増大している（山田・石田・井上，2008）。スロスビーによれば、文化資本とは「経済の価値に加え、文化の価値を具体化し、蓄積し、供給する資産」であり、有形と無形の2つの形態がある（Throsby, 2001）が、山田らは、祭りを一種の無形文化資本であると見なしている。祭りは「無形文化」資本なので、観光産業や商業などをはじめ、都市と地域の

★本稿は、日韓海峡圏研究機関協議会研究報告会への報告論文「都市振興における祭りの役割：北九州の取り組みと課題」に加筆修正したものである。本稿の執筆にあたって、わっしょい百万夏まつり振興会事務局の長田英徳氏にご協力いただいた。この場を借りて厚く御礼申し上げる。

総生産に貢献していることは当然なことであろう。こうした認識は、文化経済学者や都市・地域経済学者および都市行政関係者の間に共有されつつある。

また稲葉は、国や地域の発展におけるソーシャル・キャピタル（Social Capital）の重要性に着目して、祭り（文化資本）とソーシャル・キャピタルの相互醸成関係を分析した（稲葉，2014）。ソーシャル・キャピタルという言葉は、教育学者のジョン・デューイが二十世紀初めに著わした『学校と社会』に出てくるが、1990年代にロバート・パットナムが著書（Putnam, 1993）の中で論じて以来大きな注目を浴びた（稲葉，2011；稲葉他，2011）。彼は、ソーシャル・キャピタルを「協調的行動を容易にすることにより、社会の効率を改善しうる信頼、規範、ネットワークなどの社会的仕組みの特徴」と定義した。信頼、規範、ネットワークなどの社会的仕組みは、人々の間に協調的な行動を醸し出すが、国・地域によって仕組みや特徴が大きく違うので、人々の間の協調性に与える影響もかなり違う。経済学では、市場を通さずに第三者に影響を与える効果を「外部性」と呼んでいるが、日本などの先進国の場合、社会メンバー間の信頼関係・信用度が高く行動の協調性・マナーも良く、ソーシャル・キャピタルの持つ外部性は、通常「正の外部性」だと見られる。このような良質なソーシャル・キャピタルは、様々の要因に影響され長い歳月を経て形成されてきたが、祭りもその要因のひとつと見なされている。稲葉は、日本各地の祭りの社会影響を考察し、無形文化財としての祭りはソーシャル・キャピタルの総合醸成器、インキュベーターであると高く評価している（稲葉，2014）。

無形文化資本にせよ、ソーシャル・キャピタルの総合醸成器・インキュベーターにせよ、都市・地域の発展において祭りが重要な役割を果たしている（果たせる）ことは認識されつつあると見られる。従来では「政教分離」の原則のもとで、伝統的な祭りは基本的に宗教団体など一部の社会団体を中心に運営されていたが、上述した認識の広がりに伴って、公共性の高い祭りに対する地方自治体の公的支援が多くなっている。ただし一方では、地方自治体の財政事情が厳しくなるなかで、祭りの運営に対する積極的な関与が財政状況の悪化に繋がるというリスクも懸念されている。本当に地域経済の活性化を促進できる祭りの運営体制を構築するためには、祭り開催のコストおよびその経済社会効果に関する実証研究が必要不可欠であるが、現状では、そのような関連研究はまだ非常に少ない。

本研究は、北九州市における祭り運営の取り組みと祭り開催による経済社会効果を考察するものである。第2章では、北九州市における代表的な祭りである「わっしょい百万夏まつり」の歴史と近年の開催実態・運営体制を紹介する。第3章では、同市の都市振興戦略における祭り開催の位置づけとその実際の効果（関連産業の促進効果およびソーシャル・キャピタルに対する醸成・増大効果）を考察する。最後の第4章では、こうした考察結果に基づいて、北九州市ならびに類似の地方都市の祭り運営のあり方について若干の提言を述べる。

2. 「わっしょい百万夏まつり」の歴史と近年の開催実態

2.1 祭りの歴史

北九州市の夏の風物詩「わっしょい百万夏まつり」は、昭和48（1973）年に、北九州青年会議所が行った「まつり北九州」を源流とする。この祭りは、昭和38年に5市対等合併によっ

て誕生した北九州市における課題であった「旧五市意識」を払拭するための新しい祭りとして「北九州の心は1つ、ふるさとをみつめよう」をテーマに、旧5市それぞれで行われていた伝統的な祭りを集める形で、初めて実施されたものであった。

昭和63（1988）年の市制25周年を機に、実行母体を北九州青年会議所から北九州市に移管し、名称も「まつり北九州」から「わっしょい百万夏まつり」に変更し、市民の心を1つに合わせ多くの人々が楽しめるまつりとして開催された。以来、毎年少しずつ進化しながら開催され、例年150万人を超える人々が市内外から訪れる祭りに成長した。

祭りでは、鮮やかな色彩のフロートや趣向を凝らした山車の行進や、総参加数約4,000人の大パレードが行われるほか、北九州を代表する小倉祇園太鼓、黒崎祇園山笠、五平太ばやし、大里電照山笠などが一堂に集まる「夏祭り大集合」、総勢1万5,000人ほどが参加しての百万総踊りや花火大会など、北九州の夏祭りを一度にまとめて楽しむことができる。

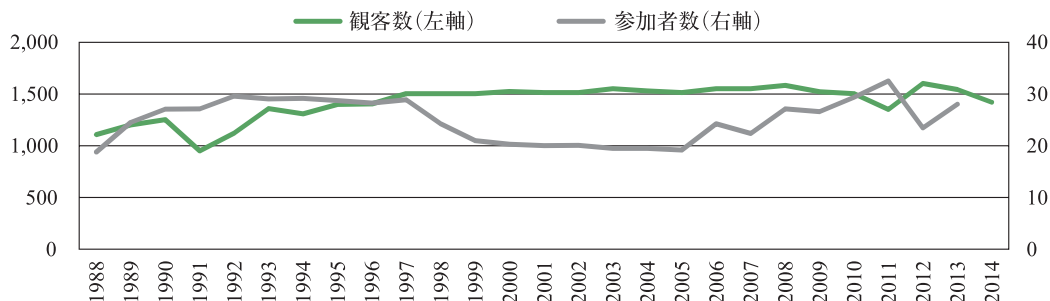
さらに平成15（2003）年の第16回からは、市民による都市間交流が盛んになることを目的に「わっしょいYOSAKOI北九州」が開始された。これは、約50チーム合計およそ1,000人が躍動感にあふれた踊りを披露するイベントで、鳴子を手に華麗で個性的な衣装で、音楽に合わせて舞うステージは迫力がある。年を追うごとに市内各地にYOSAKOIのチームが増え、観るまつりから、参加するまつりへと変貌する「わっしょい百万夏まつり」には欠かせないイベントになっている。

2.2 近年の開催実績

昭和63（1988）年、北九州市の市政25周年の記念行事として開催されて以来毎年開催され、平成26（2014）年8月には第27回の「わっしょい百万夏まつり」が開催された。図1にその間の観客数および参加者数の推移を示す。

昭和63（1988）年の第1回には、街は訪れた人たちで大混雑となり、魚町商店街では深夜になっても閉店できないほどであったという。このような結果を受けて、当初は周年記念行事として単発的に開催されたものであった「わっしょい百万夏まつり」が、毎年開催されることとなった。その後順調に参加者・観客を増やし、観客数は2000年ころまでは増加傾向にあったが、およそ160万人で頭打ちとなっている。また参加者数は2万人からスタートしたが1990年代にはおよそ3万人になり、2000年代に入りおよそ2万人にまで減少したものの、その後再び3万人程度に回復している。

図1 「わっしょい百万夏まつり」の観客数および参加者数の推移(単位：千人)



(出所) わっしょい百万夏まつり振興会資料より作成

平成4（1992）年の第5回からは観覧のための桟敷席を設置することになり、これは第7回からは有料化された。第8回には2日間で延べ8,400席もの座席が用意されたが、平成26（2014）年の第27回では席数は延べ1,100席にまで減少している。

平成5（1993）年の第6回からはテレビ中継も開始された。当初は福岡の民放5局がそれぞれのイベントを中継していたが、第14回ら徐々に中継するテレビ局が減少し始め、第19回以降はテレビでの中継は行われていない。

3. 北九州の地域振興戦略における祭りの位置づけと実際の効果

3.1 マスタープランにおける祭りの位置づけ

ここでは、北九州市のマスタープランである基本構想・基本計画における「祭り」の位置づけの変遷を整理する。対象とするのは、昭和38（1963）年の北九州市誕生以降に策定された4つの基本構想、基本計画である（表1）。

①北九州市長期総合計画・基本計画（1965年）

長期総合計画基本計画では、観光産業とレクリエーションに関する計画において、「わずかに残された民俗芸能も積極的に保護・助成しなければならない」との記載がなされているほか、文化財の保護に関する項目において、「無形文化財については、地元市民の協力のもとに恒久的な保護策が採られる必要がある」と記されている。

この長期総合計画の実施計画書（1966～70年）においては、観光振興対策として、「本市は（略）産業観光資源および民俗芸能等の文化的観光資源などに恵まれている」としたうえで、自然観光開発、産業観光開発に次いで、民俗芸能等文化的観光資源の開発を行うとしている。

実施計画を引き継いだ中期計画（1971～75年）では、文教計画として「市民文化の高揚」を掲げ、「郷土意識のかん養をはかり、無形文化財に対する認識を深めるため、本市に古くから伝わる郷土芸能を育成、助長する」とあるほか、産業計画として「産業の振興」の項に「なお、古くから伝わる祭りや郷土芸能については、市民の郷土意識のかん養に果たす役割を考慮し、積極的な振興をはかる」と記述されている。

②北九州市基本構想・長期構想（1974年）

1974年に策定された「北九州基本構想・長期構想」では、まず「都市の将来の姿」記述した部分で、都市空間における催しに関して以下の記述があるのが興味深い。「四季の変化やさまざまな事件の記憶を確かめるために、催しものや祭礼が生まれ、これによって、同じ場所に住むという共同の意識がかたちづくられてきたのだが、現代の大都市はこのような習慣を喪失

表1 北九州市の基本構想・基本計画

基本構想・基本計画	策定年月	目標年	備考
北九州市長期総合計画・基本計画	1965年 2月	1980年	1973年3月で打ち切り
北九州市基本構想・長期構想	1974年 3月	1990年	1988年3月で打ち切り
北九州ルネッサンス構想	1988年12月	2005年	
「元気発進！北九州」プラン	2008年12月	2020年	

（出所）筆者作成

しつつある。北九州市にとっても状況は同じで、合併以前に各市がもった独自の祭りさえ、いまは性格がはっきりしなくなった。それに代わる全市的な祭りはいまだつくりだされていないが、いつかは生まれてくるだろう。その芽を伸ばし、数多くの試みのなされることが必要である」とあり、「わっしょい百万夏まつり」の誕生を予感させる。

この長期構想の実施計画に相当する「新中期計画（1975～79年）」では、文化財の保護について「市民の文化財である有形、無形の文化財の指定と、その保護策を積極的に進める」とあるほか、観光施設の整備について「小倉城、各種の祭など市内観光資源の保護と整備を進め、適切なPR・案内などを行う」と記載されている。

これを引き継ぐ「新・新中期計画（1980～84年）」では、文化財の保護に関して「市内の由緒ある建物など市民の文化遺産である有形、無形の文化財の保護、保存を進める」との記述があるほか、観光に関する記述部分において、「自然の美しさ、史跡、祭りあるいは産業など、広く北九州市を紹介するため、観光パンフレットや観光映画の制作など、紹介、宣伝につとめる」としている。

③北九州ルネッサンス構想（1988年）

基本計画の部門別施策のうち「4海にひろがるにぎわいの交流都市を目指して」のなかの最後の項目に「(9) 観光・リゾート地区の整備促進、祭りや産業観光の振興」が挙げられている。ここではその背景として「本市においても、海や山の豊かな自然、伝統的な祭り、多様な産業技術の集積、港町の雰囲気などの観光資源を活かした魅力あるまちづくりを進めるとともに、百万都市としてのポテンシャルを活かし、都市としてのにぎわい、楽しさ、個性（らしさ）などの都市型観光の魅力を創出していく必要がある」と述べている。そのための施策として、「小倉祇園や黒崎祇園、戸畑祇園をはじめとする長い伝統にはぐくまれた祭りや各地に伝わる民俗行事を大切に保存し、その活性化を図る」との記述がある。

「北九州ルネッサンス構想」には第1次から第3次までの実施計画が策定された。それぞれの計画のなかでも祭りに関する具体的な取り組みが記されている。第1次～第3次の実施計画には、観光振興としての位置づけで「本市の伝統的なまつり行事の保存・振興に助成を行う」との記載がある。また「わっしょい百万夏まつり」についても記述があるが、第1次では「全市的な祭りを通して、市民意識の一体感を醸成し、本市のイメージアップと活性化を図るため、『わっしょい百万夏まつり』を継続し得て開催する」とあるが、第2次以降では「百万市民のまつりとして一層の定着を目指すとともに、本市の観光資源として積極的なPRを展開していく」、第3次では「市外からの観光客の誘致と市のイメージアップを図るため、『わっしょい百万夏まつり』を引き続き開催し、北九州市民のまつりとして一層の定着をはかる」とあり、若干表現のニュアンスが変化している。

④「元気発進！北九州」プラン（2008年）

基本計画の分野別施策のうち「生活に根付き、誇れる文化・スポーツの振興」の1番目に「(1) 地域文化の保存・継承」が挙げられている。ここでは「地域に根ざした固有の食文化や祭り、伝統芸能などの伝統文化を発掘し、子どもたちに伝えるなど後世に伝承します」と記述されている。また、基本計画第9章の「各区の魅力づくり」として、小倉北区では「歴史・文化・祭りを振興するとともに、水辺と緑を活かした潤いと文化の薫るまちをつくります」、戸畑区で

は「200年の歴史を持つ戸畑祇園大山笠行事，魅力的な資源が豊富な夜宮公園などを活かしたまちづくりとブランド化を進め，住民の誇りの醸成とにぎわいの創出を図ります」とそれぞれ述べられている。

3.2 祭り運営の取り組み

北九州市の市制25周年を記念して開始された「わっしょい百万夏まつり」は，当初は北九州市も多く予算と人員を投入していた。また地元企業を中心とするスポンサーも多く，その協賛金も多額であり，潤沢な予算と人員を使って祭りを運営していた。例えば祭りの運営を担っている「わっしょい百万夏まつり振興会事務局」の職員は，当初は市から4名の常勤職員が派遣されており，さらに祭りの直前には十数名の応援職員が派遣されていた。しかし現在では市からの派遣は常勤が1名，応援も5名に減少している。事務局以外には，実務に当たる実行委員会が形成されているが，これは主に青年会議所のメンバーが担当している。青年会議所のメンバーはボランティアとしてこの役割を担っている。祭り当日の会場整理などで必要となる人員についても，警備会社等に委託する以外に青年会議所のメンバーが多数参加しており，祭りの前身である「まつり北九州」を起ち上げた青年会議所が「わっしょい百万夏まつり」でも重要な役割を果たしていることが分かる。

現在の事務局の体制は，市と観光協会からそれぞれ派遣職員が1名ずつ，その他にプロパールの職員が1名おり，合計3名で年間の業務を行っている。「わっしょい百万夏まつり振興会」の平成25（2013）年度における決算額を見ると，全体でおよそ1億円の経費がかかっているが，そのうち北九州市の負担金は4,800万円であり，祭りにかかる経費のおよそ半分が市の負担であることが分かる。費用の残りは企業等からの協賛金や，祭りの参加料や観覧席の売上げなどで賄われている。

3.3 祭りの実際の効果

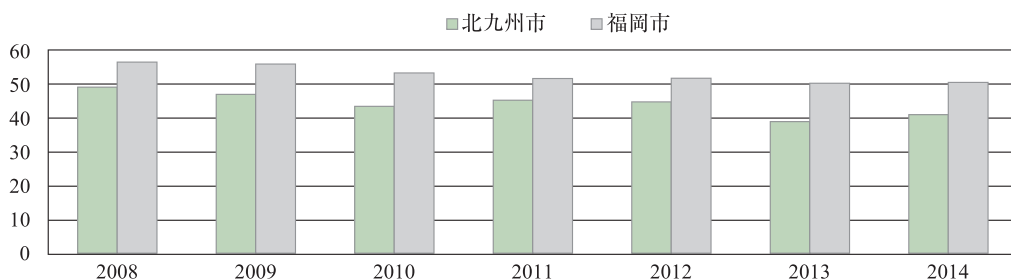
本節では，今や北九州市を代表する祭りとして位置づけられる「わっしょい百万夏まつり」の開催が北九州市にもたらした影響と効果について述べる。

①北九州市の知名度への影響

ここでは，ブランド総合研究所の「地域ブランド調査」の結果から，北九州市の知名度への影響について考察する。この調査における「認知度」指標とは，「以下の市区町村について，どの程度ご存じですか？」という問いに対して，「よく知っている」を100点，「知っている」を75点，「少しだけ知っている」を50点，「名前だけは知っている」を25点，「名前も知らない」を0点として，それらを加重平均して点数を算出したものである。1つの市区町村についての回答者数は調査年および対象市区町村によって異なっており，2014年の調査では472人から655人の範囲であった。

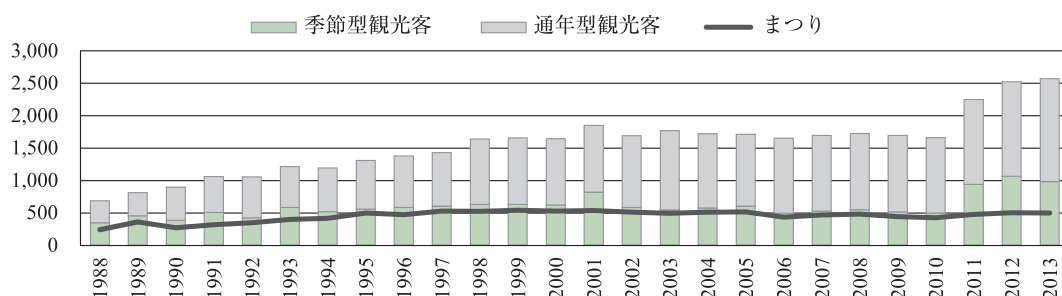
図2に北九州市と福岡市の「認知度」指数の2008年から2014年までの7年間の推移をグラフにしたものを示す。これを見ると，両市ともに認知度は減少傾向にあるが，福岡市に比べて北九州市の認知度は低いことがわかる。例えば最近の2014年のデータでは，福岡市の認知度指数50.8であったに対して北九州市のそれは41.2と10ポイント近い差があった。

図2 北九州市と福岡市の認知度指数の経年推移



(出所)ブランド総合研究所(各年版)より作成

図3 北九州市の観光客数の推移(単位:万人)



(注)2011年から観光客の調査基準が変更された。

(出所)北九州市(2012, 2013, 2014a)および北九州市(2014b)より作成

この間、「わっしょい百万夏まつり」の観客数はこれとは異なる挙動を示していることから、近年の「わっしょい百万夏まつり」の認知度の増加が全国レベルでの北九州市の認知度の上昇に結びついていないと考えられる。ただし、もしも1988年から今までのより長い期間の北九州市の知名度の変化を調べることができれば、「わっしょい百万夏まつり」による北九州市の知名度への影響は、もっと高く評価されると考えられる。

②北九州市都心部のインフラ整備への影響

第1回目の大成功によって毎年の開催が決まった「わっしょい百万夏まつり」は、開催場所であった小倉都心部のインフラ整備に変化をもたらした。祭り開催時の混雑に対応するため、北九州市は次のような整備を行っている。

まず、祭りの開催場所は小倉城と北九州市役所を中心とする広場とその前面道路であったが、この道路が一方通行の狭い道路であった。大勢の人が参加するイベントに対応するためにこの道路を拡幅したが、その際に中央分離を可動式のものとし、祭り開催時には一時的にこれを取り除くことで、幅の広い4車線道路を全てイベント空間として利用できるようにしている。

また、市役所の南側にあった市民会館を移転し、跡地を公園として整備するとともにその下に地下駐車場を整備した。この勝山公園は「わっしょい百万夏まつり」ではYOSAKOIなどのイベント広場として、またそれ以外にも年間を通して多数のイベントが開催される、小倉都心では貴重なオープンスペースとして活用されている。

市役所の東側には北九州市で最も大きな河川である紫川が流れているが、河川改修事業である「紫川マイリバーマイトウン整備事業」なども活用しながら、「わっしょい百万夏まつり」

の開催を念頭に置いたまちづくりを推進してきた。その結果、前述の勝山公園以外にも、平成15（2003）年4月にオープンした大型複合商業施設「リバーウォーク北九州」、平成23（2011）年3月に竣工された、当時福岡県で最も高い建築物となった「小倉D.C.タワー」の建設など、賑わいのある都心形成を指向した都市開発につながったといえる。

③北九州市の観光関連ビジネスへの影響

図3に「わっしょい百万夏まつり」が始まった昭和63（1988）年から平成24（2012）年までの北九州市の観光客数の推移を示す。ここでいう「季節型観光」とは、まつり・コンベンション・海水浴等のイベント型観光のことを意味し、「通年型観光」とはそれ以外の通常の観光のことを意味する。また、2011年から観光客数の調査基準が変更になっているため、その前後でデータが整合しない点に注意する必要がある。

これを見ると、北九州市の観光客数は旧基準で年間およそ1,700万人、新基準では年間およそ2,500万人という水準であることが分かる。また、2000年頃を境にして傾向に大きな変化があったこと、例えば北九州の観光客数は2000年頃までは増加傾向にあったが、それ以降は停滞していること、観光客数に占める季節型観光の比率は減少する傾向にあったが2000年以降は一定の水準を保っていることが大きな特徴である。さらに、季節型観光に占める「まつり」の比率は一貫して高い水準にあることも読み取ることができる。

表2は、平成25（2013）年の北九州市内の主な祭り行事の観光客数を一覧にしたものである。北九州市内の祭り行事でもっとも観覧者数が多いのが「わっしょい百万夏まつり」である。したがって、北九州市の祭り行事の中で観光集客に最も貢献しているのも「わっしょい百万夏まつり」であるともいえる。しかしながら、祭り行事観光客に占める宿泊客の割合はわずか1.5%（北九州市、2014a）であり、そのほとんどは日帰り客である。短期間のイベントなので、宿泊業への直接的な影響はそれほど大きくないかも知れない。わっしょい百万夏まつり振興会事務局が平成25（2013）年に実施した来場者へのアンケート調査によると、来場者のおよそ70%が北九州市内から、20%が福岡県内から、10%が県外（主に山口県）から来ていることが分かった。北九州市内に宿泊したのが全体の約6%でそのうちの3分の1（全体の約2%）が市内の

表2 北九州市の祭り行事観光客数(2013年, 単位：万人)

まつり	見物客数	開催時期	開催場所
わっしょい百万夏まつり	154.0	8月 3～4日	小倉北区・小倉都心部
関門海峡花火大会	70.0	8月 13日	門司区・関門海峡沿岸
まつり起業祭八幡	63.0	11月 2～4日	八幡東区・大谷地区一帯
黒崎祇園山笠	38.0	7月 19～22日	八幡西区・黒崎副都心部
くきのうみ花火の祭典	32.0	7月 19日	若松区・若松南海岸
小倉祇園太鼓	30.0	7月 19～21日	小倉北区・小倉都心部
門司みなと祭	26.0	5月 25～26日	門司区・門司港地区
戸畑祇園大山笠競演会	23.0	7月 26～28日	戸畑区・戸畑区役所周辺
北九州小倉城まつり	9.5	10月 19～20日	小倉北区・小倉都心部
まつりみなみ	8.5	8月 17日	小倉南区・志井地区

(注)見物客数は主催者発表による。

(出所)北九州市(2014a)より抜粋

ホテル・旅館に宿泊している。祭りでの消費額の調査も行っており、これらの数値から、振興会事務局は第26回のわっしょい百万夏まつりの開催効果として47億円あまりの経済効果があったと試算している。

④北九州市の市民コミュニティへの影響

すでに述べたように、「わっしょい百万夏まつり」は5市対等合併で誕生したという北九州市の他に例を見ない経緯から生まれたイベントであり、旧市意識の強かった市民の「ここを1つに」することが当初の目的であった。しかし近年では、祭り開催の目的の主眼は、市民融和から観光誘致へとシフトしている。すなわち、この祭りの当初の「北九州市民意識」の醸成という当初の目的は一定程度達成されたものと考えられる。

また、近年では「わっしょい百万夏まつり」への企業単位での参加が増加しているが、参加する企業の目的は、おもに「社内融和」・「社内コミュニケーション」などにあり、必ずしも市民へのPR・宣伝やCSRのような観点から参加しているわけではないという。つまり「参加型」の祭りである「わっしょい百万夏まつり」が、市内企業の社内イベントとして活用されることで、地域企業に貢献しているといえる。この祭りに積極的に参加しているある生命保険会社では、北九州支店の売上げが全国の支店のなかで最も大きかったという話もあった。

北九州市では、平成7(1995)年から地域コミュニティの拠点として「市民センター」の設置を進めている。およそ小学校区単位に1つ程度の割合で設置されており、現在では市内に134の市民センターが存在している。市民センターでは市民が様々な活動を行っているが、市民センターの機能の1つが「まちづくり協議会」や「社会福祉協議会」などの活動の拠点としての機能である。この市民センターが協議会を通して祭りへの地域住民参加を呼びかけるとともに、百万踊りの練習の場を提供しており、市民が「わっしょい百万夏まつり」へ参加するきっかけ、拠点となっていると同時に、祭りを通して地域住民のコミュニティ形成に貢献している。

4. 今後の課題と提言

北九州市には合併以前から地域に根付いた伝統的な祭りが数多く存在したが、北九州市全体での祭りは存在しなかった。市制25周年を記念して開始された「わっしょい百万夏まつり」は、北九州市民という意識、北九州市の一体感の醸成を狙いとして始められた「まつり北九州」を源流とする。しかし最近では当初の狙いはおおよそ達成され、祭り開催の主眼は北九州市民が参加する集客イベントへと変化しつつある。

そのように祭りを取り巻く環境が変化しつつあるものの、祭りの観客数や参加者は頭打ちの状況である。北九州市の人口が減少しつつあるなかで一定規模の観客数および参加者数を維持していることは評価されるべきかも知れないが、地域経済における観光産業の重要度が年々増していることを考えれば、観光集客産業の主要課題として観客数の増加に取り組むことも必要だろう。そのためには、現状の北九州市民が参加する祭りから、広く遠方からの観光客が参加するイベントへと脱皮することが求められる。

北九州市の全国知名度は福岡市よりも低く、近年減少傾向にある。また、「わっしょい百万夏まつり」の参加者はそのほとんどが北九州市民である。北九州市制50周年であった昨年に、

福岡市で「わっしい百万夏まつり」のPRイベントを行ったところ、福岡市での北九州市の祭りに対する認知度の低さに愕然としたと担当者は言う。今後はより広い範囲での「わっしい百万夏まつり」の認知度向上と観覧意欲の刺激について工夫が求められている。

北九州市のイメージは「工業都市」あるいは「環境都市」と捉えられがちであるが、豊かな文化をもつ「観光都市」へと今一歩踏み出すべき時期ではないだろうか。その核として「わっしい百万夏まつり」を北九州市の最重要の観光資源として位置づけようという意識をもっと前面に出してもよいのではないだろうか。

青年会議所の協力を今後も得られれば、祭り運営に必要な人手の確保についてはそれほど心配しなくてよい状況である。したがって、今後の展開の裏付けとなる「費用」の工面をどのようにするのか、地域経済の成長戦略のなかで、「祭り」をその成長エンジンとしてどのように位置づけるのかという点が、具体的な課題として残されている。

参考文献

- 稲葉陽二（2011）『ソーシャル・キャピタル入門：孤立から絆へ』中央公論新社
- 稲葉陽二（2014）「祭りとソーシャル・キャピタル」第62回文化の社会経済研究会報告論文（大阪府岸和田市 だんじり会館，2014年6月29日）
- 稲葉陽二，大守隆，近藤克則，宮田加久子，矢野聡，吉野諒三（2011）『ソーシャル・キャピタルのフロンティア－その到達点と可能性－』ミネルヴァ書房
- 北九州市（1965）『北九州市長期総合計画基本計画』
- 北九州市（1966）『北九州市長期総合計画実施計画書』
- 北九州市（1970）『北九州市中期計画 1971～1975』
- 北九州市（1974）『北九州市基本構想・長期構想』
- 北九州市（1975）『北九州市新中期計画 1975～1979』
- 北九州市（1980）『北九州市新・新中期計画 1980～1984 プラン '80 北九州』
- 北九州市（1988）『北九州市ルネッサンス構想』
- 北九州市（1989）『北九州市ルネッサンス構想第一次実施計画』
- 北九州市（1994）『北九州市ルネッサンス構想第二次実施計画』
- 北九州市（2000）『北九州市ルネッサンス構想第三次実施計画』
- 北九州市（2008）『「元気発進！北九州」プラン 北九州市基本構想・基本計画』
- 北九州市（2012，2013，2014a）『北九州市観光動態調査報告書』
- 北九州市（2014b）『北九州市観光振興プラン』
- ブランド総合研究所（各年版）『地域ブランド調査ハンドブック』
- 山田浩之，石田信博，井上馨（2008）「都市祭礼の社会経済的側面－岸和田だんじり祭の運営を中心として－」『文化経済学』6（2），pp. 71～79
- Putnam, Robert (1993) *Making Democracy Work*, Princeton, NJ: Princeton University Press.（河田潤一訳『哲学する民主主義－伝統と改革の市民的構造－』NTT出版，2001）
- Throsby, David (2001) *Economics and Culture*, Cambridge University Press.（中谷武雄，後藤和子監訳『文化経済学入門－創造性の探求から都市再生まで－』日本経済新聞社，2002）